

マルコ 9 章 14～29 節「不信仰な者を信仰に招く」

今日開いた 9 章には、山の上でイエス様の栄光が表された出来事と、その山のふもとでの苦しみと混乱の出来事が記されています。そのような対比があります。しかし、罪に満ちた世の現実にも主が勝利するのを見ます。そして、この出来事を通して、不信仰な者を信仰に招いてくださる主イエス様の恵みを知ることができ、その主の恵みに本当に信頼することを教えられます。

1. 不信仰な時代だ（：14～19）

山のふもとに登場しているのは一人の父親です。この人の息子は幼い時から汚れた霊に取りつかれていました。息子に霊が取りつくつと、どうしようもなくなり、父親は自分の無力さを深く感じていたでしょう。病気を治したり、悪霊を追い出したりすることができるというイエスに期待して、息子連れて来て来ました。

ところがちょうどその時、イエス様は 3 人の弟子だけを連れて山に上り、そこで人となられた神の御子としての本来の栄光の姿を垣間見せた出来事が起こっていました。

その山のふもとで、残っていた弟子たちにこの父親は息子のことを訴えて、霊を追い出して欲しいと願いました。弟子たちはそれまでにイエス様に送り出されて町や村を訪ね、イエス様から教えられた御国の福音を語ると共に、自分たちの手によって病気をいやし、悪霊を追い出していました（マルコ 6:7、12～13）。ですから、弟子たちは自分たちでできるだろうと思って、この子から霊を追い出そうとしました。けれども、霊は出ていきませんでした。日頃イエス様のことを良く思っていなかった律法学者たちは論争を吹っかけ、弟子たちの無力を責め立てます。周りには大勢の群衆が取り囲んでいます。そこにイエス様が戻って来られました。

そのように山のふもとでは不信仰が支配していました。悪霊を追い出すことのできない弟子たち。また人々の救いのためには役に立たない、むなしい論争に明け暮れる律法学者。野次馬の群衆、そして彼らに囲まれた息子と父親。救いのない人間の姿がそこにあつたのです。イエス様は「ああ、不信仰な時代だ。いつまで、わたしはあなたがたと一緒にいなければならないのか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか」と深く嘆いておられます。これは、いったい誰の不信仰を嘆かれたのでしょうか。弟子たち以外のユダヤの人々の不信仰でしょうか。この父親の心に信仰がないと嘆かれたのでしょうか。そうかもしれませんが、それと共に、弟子たちの不信仰を嘆かれたと考えることができないのでしょうか。

ところで、なぜ弟子たちには悪霊を追い出すことができなかったのでしょうか。28～29 節。弟子たちは、イエス様に遣わされて町や村をまわって人々の病気を治した時に、祈ったはずですが、この時も、弟子たちは祈ったに違いありません。ところが、その祈りは聞かれなかったのです。真実の信仰から出る祈りではなかったということでしょう。弟子たちは自分たちの経験に頼っていたのではないのでしょうか。

いったい信仰とは何でしょうか。私たちが祈ります。けれども、信仰から出てくる本物の祈りとそうでない祈りがあるとすると、私たちは確信をもって祈ることができなくなってしまいます。いったい、イエス様に認めていただけるような信仰、祈りとはどのようなものなのでしょうか。

2. 不信仰な自分を主にゆだねる（：20～27）

この箇所は、まさにその点で一つの答えを与えています。ここでイエス様にお会いすることができた父親が、イエス様に対して真実な信仰をもって出会っていると言うことができます。

20～22 節。イエスならば自分の子どもを悪霊から解放してくださると望みをかけて連れて来た。けれども、イエスの弟子たちは何もできなかった。これまで失望の経験を重ねてきた父親からすると、その弟子たちの先生であるイエスに頼んでもだめかもしれないという思いもあつたでしょう。だめだった時に落胆が大きくなるから、あまり期待しすぎないようにとも思ったでしょう。父親は「おできになるなら」と言いました。これは正直な心を表しています。

するとイエス様はすぐにその言葉を受けて言われました。「できるなら、と言うのですか。信じる者には、どんなことでもできるのです」。このイエス様のことは、明らかに父親を戒めています。できるだろうかできないだろうかというあやふやな思いを持って願うのは確かに失礼です。このことは祈りにおいても同様でしょう。聞かれるか聞かれないか分からないけど祈ってみるといふのは、確かに間違っています。祈るなら必ず聞かれ

るという信頼を持たなければいけません。他の箇所では、「あなたがたは、信じて祈り求めるものは何でも受けることとなります」(マタイ 21 : 22)とイエス様は言っておられます。

イエス様のことばに対して一つ考えられる答えは、「しまった」という気持ちが当然出てくるでしょうから、「とんでもないことを申し上げました。こんな半信半疑ではいけませんでした。お赦してください。言い直します。あなたは必ずおできになります。それを信じますから、どうぞ私の子どもを助けてください」。おそらく、そのように言う人が多いのではないのでしょうか。しかし、この父親はそうは言いませんでした。「信じます。不信仰な私をお助けください」。これは不思議なことばです。一方では「信じます」と言っています。ところが、そう言った後で「不信仰な私」と言っています。信仰と不信仰が同時に存在しているのです。

でも、それは私たちの状態でもあります。私たちも「信じる」と言いながらも、本当に信じているのか、確信が持てないということがないのでしょうか。自分には信仰が十分ではない。でも信じます。これが私たちの信仰の真実の姿でしょう。信仰とは自分の内に拠り所を持たないのです。ただただ神様に依り所を見出すのです。自分を見る時には「不信仰」としか言いようがないけれども、それでもその不信仰な自分を引き受けて下さるイエス様を仰ぎ見るのです。信じることができない自分をイエス様にゆだねるのです。これが信仰です。

「できるなら、と言うのですか。信じる者には、どんなことでもできるのです」というイエス様のおことばは、父親を信仰に招くことばです。信じるということは、わたしにすべてをゆだねるということ、信じることができないあなたの心を、わたしにゆだねてしまうことです、と主は言われたのです。

3. 祈りによらなければ (: 28~29)

そのあとで、主イエス様は汚れた霊を叱って、「この子から出て行け。二度とこの子に入るな」と命じました。すると霊はその子から出て行きました。御業が行われ、主イエス様の力と権威が示されました。

一件落ち着いた後、家に入った時、弟子たちがイエス様にそっと尋ねました。「私たちが霊を追い出せなかったのは、なぜですか」。弟子たちとしては、自分たちの取り組みがうまくいかず、恥をかいたようなことでしたので、そっと尋ねたのです。彼らはやはり自分たちで悪霊を追い出せると思っていたようです。彼らができるつもりでいたのは、おそらく過去の経験があったからでしょう。しかも、その過去の経験を主の恵みではなく自分の手柄のように考えていたのでしょう。それで、なぜ今回はできなかつたのかと思ったのです。

かつてできたことができない、祈ったはずなのにうまくいかない、というなかで弟子たちが学ぶべきことは、主の恵みに本当に信頼するということでした。イエス様のことば、「できるなら、と言うのですか。信じる者には、どんなことでもできるのです」ということばは、主の恵みに本当に信頼するなら、主の御業によってどんなことでもできるということです。そのことを弟子たちは学ぶ必要がありました。

私たちも同じように、自分でできるつもりになって、主の恵みに信頼することを忘れてしまっていることがないでしょうか。そうではなく、その時その時に、一つ一つのことに、神様の恵みを祈り求め、本当に信頼していることが必要です。そして、主の恵みによって歩むことは、主の力が表されることになるので、力強い歩みとなります。主の恵みによって歩む力強さを経験することになるのです。

どうぞ、まだイエス様に自分をゆだねきれていない方も、イエス様に自分自身をゆだねましょう。信じることができないという思いを持ちながらも、その自分をイエス様にゆだねればよいのです。「信じる者には、どんなことでもできるのです」と救いと祝福を与えようと招いてくださっているイエス様にお任せしましょう。自分の持つ何かに頼るのではなく、不信仰な自分をも受け入れて、救いを与えてくださる主イエス様に信頼しましょう。

また、クリスチャンの方々も、日々祈る中で、この祈りは聞かれるのだろうか、みこころにかなっているのだろうかと思われ動くことがあるかもしれません。しかし、みことばによって正され、励まされて、自分を主に委ねて祈るように導かれます。また、過去の成功や自分の野望のために主の恵みへの信頼が欠けることがある私たちです。しかし、思い通りにいかないことによって、本当に主の恵みに信頼して自分を献げて祈るように導かれます。「信じる者には、どんなことでもできるのです」と告白し、主の恵みによって力強く歩むことを経験させていただきましょう。